

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝



「子どもの考動力を育てる」

地方の公立校を全国屈指の強豪校に育てた熊本県立大津高等学校の平岡和徳サッカー部総監督の新聞記事（熊本日日新聞）を紹介します。

1 「夢中にさせる」

- ・子どもが上手になる秘訣は、「いかに夢中になれるか」である。そのためには、子どもと「本気で向き合う」ことはもちろんだが、「子どもたちの未来に触れている」深い自覚をもつことが何より重要である。

→子どもの大切な命と未来を預かっていることを肝に銘じ、子どもと本気で向き合い、本音で語り合い、本物の力を育みましょう。

2 「重視する1秒の言葉」

- ・「おはよう」「ありがとう」「ドンマイ」「ナイストライ」「大丈夫」など、その言葉を掛ける時間は1秒ほどだが、内容や口調、タイミングを子どもに合わせて変えている。



→言葉には温度があります。温かい言葉は心を和やかにし、勇気づけてくれます。冷たい言葉は心を傷付け、絶望的にさせてしまいます。たった一言が子どもの人生を変える力をもっています。温かい言葉をタイミングよく掛けましょう。

3 「子どもは自分の参考書」

- ・同じ教員だった平岡和徳総監督の父親の口癖は「子どもが自分の参考書」だった。子どもたちに向かって、「何やってんだ」というのは自分の指導力のなさの表れであり、「天に向かってツバを吐くようなものだ」と戒められていた。

→「どうしてできないの」ではなく、「どうしたらできるようになるか」と、子どもの見方を変えて味方になることで有効な支援が見えてきます。困ったときは子どもを見てください。子どもが答えを教えてください。

4 「子どもの考動力を育む」

- ・やらされる練習では、考えることをしなくなる。終わりが決まっていなくて人間は途中を頑張れない。やらされる時間を最小限に、自分から「やる」時間を最大限にするのが理想である。子どもたちが主体的に考え、目の前の状況に対応する『考動力』を育てるのが、スポーツであり、部活動である。

→人は教えられたことはすぐ忘れますが、自分で気付いたことは忘れないものです。自分で気付くから、やる気が出ます。やる気になった子どもの伸びしろは無限大です。



とれたて直送便



☆活動の切り替えは、見えるように聞こえるように、やってほしいことを言葉にする



5歳児のお部屋で子どもたちが夢中に遊んでいたとき、担任のT先生が時間の経過を色で示す時計『タイムタイマー』をセットして、「あと5分で片付けです」と予告しました。子どもたちは時計を気にしながら遊んでいます。そして、片付けを告げる音が鳴りました。T先生は「もっと遊びたかったよね。また明日できるよ」と、子どもの気持ちに共感してから、いつできるかを言葉にしました。次に「Dさんが片付けをしているよ」と、やってほしい行動をしている子どもをほめた途端、全員が一斉に片付けを始めました。鮮やかな切り替え場面でした。